

## 「近いって、お前」

---

任務終わりの夜。ヨルファミリア本部・大食堂の一角では、  
ゆーカスといんカスがソファを占領していた。

「いんカス、そこ詰めろ」

「空いてるだろ」

「端っこ座りづらい」

「知らねーよ」

そう言いつつ、いんカスは少し横へずれる。

「サンキュ」

ゆーカスが座る。……近い。肩と肩が普通に触れている。

「お前近くね？」

「お前が詰めたんだろ」



「いや、お前がデカいんだよ」

「関係ねえだろ」

テレビでは映画が流れている。五分後。

「……………」

ゆーカスの頭が、こてん。いんカスの肩に乗った。

「……おい」

「んー」

「重い」

「じゃあどかせば？」

「……………」

どかさない。

「重いんじゃないの？」

「うるせえ」



「素直じゃねーなあ」

「寝るなら部屋戻れ」

「ここがいい」

「なんで」

「お前いるから」

「……………」

「……………」

「そういう言い方やめろ」

「なんで？」

「なんかキモい」

「ひっでえ！」

ゆうカスが笑いながら身体を起こす。その瞬間、

「……別にどかなくていいけど」



いんカスが小声で言った。

「え？」

「映画見えなくなるから動くなって言ってるの」

「俺が肩にもたれてても？」

「……好きにしろ」

「へえ～？」

「なんだよ」

ゆうカスがニヤニヤする。そして——再び、ぽすっ。今度はさっきより深く肩にもたれた。

「……………」

「……………」

いんカスの耳が少し赤い。



翌朝。

「ゆーカス」

「ん？」

「ネクタイ曲がってる」

「マジ？」

「じっとしてろ」

いんカスが正面に立つ。ゆーカスのネクタイを掴んで整える。

「……………」

「……………」

距離、約二十センチ。ゆーカスがじーっといんカスを見る。

「何」

「いや」

「何だよ」



「お前、意外と世話焼きだなと思って」

「お前がだらしねえだけ」

「じゃあ毎朝やってよ」

「は？」

「ネクタイ」

「自分でやれ」

「いんカスの方が上手いじゃん」

「知らねえよ」

言いながらもきゅっ。最後まで綺麗に締めてくれる。

「ほら」

「おー」

ゆーカスが鏡を見る。

「完璧」



「だろ」

「ありがとな」

ぼん。ゆーカスが何気なく、いんカスの頭を撫でる。

「……………」

「……………」

「触んな！」

「いてっ！」

手を叩き落とされた。

「なんだよ！」

「急に頭触んな！」

「ネクタイ直してくれたお礼だろ！」

「お礼で頭撫でる奴いるか！」

「じゃあ何がいい？」



「何もいらねえ！」

「ハグ？」

「もっといらねえ！」

「じゃ、決まり」

「何が！？」

ぎゅっ。

「うおっ！？」

ゆうカスがふざけて抱きつく。

「離せバカ！」

「お礼！」

「こんなお礼あるか！」

「友情のハグ！」

「三秒以内に離れろ！」



「はいはい」

「三」

「もう？」

「二」

「いんカス冷てえな～」

「一」

「分かったって！」

ぱっ。ゆーカスが離れる。

「……………」

「……………」

一瞬だけ。いんカスが自分の胸元を見る。

「……？」

「何？」



「いや」

「顔赤くね？」

「赤くねえ」

「いや赤いって」

「うるせえ！」

---

その日の訓練。二人はいつものようにコンビを組んでいた。

「右！」

「分かってる！」

ゆーカスが前へ出る。いんカスが死角をカバー。説明なんて必要ない。視線ひとつ。足音ひとつ。それだけで互いの動きが分かる。訓練終了。

「っしゃ！」

ゆーカスが手を上げる。



「ナイス」

パンッ！ハイタッチ。……のはずだった。ゆーカスが、そのままいんカスの手を掴む。

「……………」

「……………」

「ゆーカス」

「ん？」

「いつまで握ってんの」

「……あ」

「……………」

「まあいいじゃん」

「よくねえよ」

「コンビなんだから」

「関係ある？」



「あるある」

ゆーカスは離さない。いんカスも——振りほどかない。

「……………」

「……………」

「なあ」

「何」

「俺らってさ」

「うん」

「結構仲良いよな」

「今さら？」

「だよな」

「何年一緒にいると思ってんだよ」

「じゃあこれくらい普通か」



「……………」

繋がった手を見る。

「……まあ」

いんカスが小さく答える。

「普通じゃね？」

「だよな！」

その瞬間、後ろから声がした。

「いや、普通ではないと思うけど」

二人が振り返る。レモンが立っていた。

「いつからいた！？」

「割と最初から」

「忘れろ！」

「無理」



レモンは二人の手を見る。

「で、いつまで手繋いでるの？」

「「……………」」

二人が同時に手元を見る。まだ繋いでいる。ばっ！！同時に離した。

「違うからな！」

ゆーカス。

「別にそういうんじゃねえから！」

いんカス。

「私、何も言ってないけど」

「「……………」」

レモンがニヤッと笑う。

「仲良しだねえ」

「うるせえ！」



「行くぞ、ゆーカス！」

「お、おう！」

二人は並んで去っていく。そして廊下の角を曲がったところで――

「……なあ、いんカス」

「何」

「さっきの」

「何」

「手」

「……………」

「嫌だった？」

少しだけ、いんカスが黙る。

「……嫌なら振りほどいてる」

「……………」



「……………」

今度はゆーカスが赤くなる。

「お前さあ……」

「何だよ」

「そういう言い方ズルくね？」

「知らねえよ」

いんカスは先に歩いていく。その耳は、また少しだけ赤かった。

「待てって！」

ゆーカスが追いかける。

「今日メシー一緒に食おうぜ」

「いつも一緒だろ」

「じゃあ今日も」

「……はいはい」



肩を並べて歩いていく二人。恋人ではない。告白なんてもちろんしていない。本人たち曰く――

**「ただの仲良い男同士」**

である。なおヨルファミリア内では、

**「それにしては距離近くない？」**

という意見が圧倒的多数だった。

